



傍観させない授業

学習スキルへの着目 ～勉強法の見直しを図る～

学習スキルとは、学習をすすめるための様々な技法ということになりますが、平たく言えば勉強方法のことです。ノートのとり方、教科書の使い方、記憶の仕方、問題の解き方等、いずれも学習をすすめるのに重要なことですが、上手な学習者もいればそうでない学習者もいます。

◆K子ちゃんへの個別学習指導から◆

K子ちゃんは、「20㎡は何cmか？」という問題に「20×100=2000」として間違えてしまい、なぜ間違いなのかかわからずいます。

T: 1㎡は何cmなの? K: 100cm
 T: なんで? K: 1mは100cmだから
 T: そうかなあ
 K: じゃあ、1000cm? 10000cm?(適当な答えを言うだけ)
 T: 1㎡ってどういうことなの?
 K: 縦1m、横1mの正方形の面積
 T: それなら、1㎡は何cmなの K: ……(無言)
 T: わからなかったら図に書いてごらんよ
 K: (大きな正方形の中に小さな正方形を書き込む)
 なんだ。100×100で10000だ！20×10000で200000 cmだ！
 T: よくわかったね。次の問題にいこう



これで十分でしょうか？本当は、K子ちゃんに学んでほしいのは、今のやりとりから浮かび上がってくる学習スキル上の問題です。第1に、K子ちゃんは、解決方法がわからなくなったときに、「定義に立ち返って考える」という習慣がなかったようです。1㎡の定義は聞けば答えることができても、自発的にそれを使って考え直そうとはしませんでした。第2に「状況を図に表してそれを使って考える」ということも普段からしていないようです。図に表せばすぐにわかるのに、その方法を自発的にはとりませんでした。指導者は、この2点を強調して指導する必要があります。それこそが、この学習を通してK子ちゃんに知ってほしいことで、それはまた、他の問題でつまずいたときにも、それを自分で克服する重要なスキルです。

「学ぶ意欲とスキルを育てる」より 市川 伸一:著(小学館)



「教育相談係」から

前号では4年生頃の子が感じる、思うようにならない不全感について触れました。

それをどう克服し、乗り越えて行くかを考える時、レジリエンス(心の強さ)という言葉が浮かんできます。

レジリエンスとは、困難に負けず、勇気をふるって思うようにならない状況を乗り越えていく、子どもの「弾力性」「回復力」と言えます。

レジリエンスが育つためには、幼児期の基本的信頼有能感の獲得などが土台となり、子の周囲には情緒的にサポートしてくれる人の存在が必要とも言われます。夏季休業後、子ども達が様々な体験を経て身に付けた、「弾力性」「回復力」を生かせるかが楽しみです。

生徒指導主事研修②から

「先生による共感、受容的な態度」とは

7月5日(金)の生徒指導主事研修②=いじめの未然防止、早期発見、早期対応=での柳生和男先生の講義から紹介します。

共感的な態度で臨むことは、相手が抱えている問題の解決に大きな力となります。また、受容的、支持的な態度で接することは、相手をリラックスさせ、自らをも客観的に観る力を引き出します。具体的な教師の姿であれば、共感的とは、一緒に泣けること、一緒に笑うこと、一緒に怒ること、一緒に悲しむこと、そして、受容的とは、側にいてあげることがあげられます。

宮沢賢治の詩の一節に、

東ニ 病氣ノコドモアレバ 行ッテ 看病シテヤリ

西ニ ツカレタ母アレバ 行ッテ ソノ稲ノ束ヲ負イ

南ニ 死ニソウナ人アレバ 行ッテ コワガラナクテモイ

トイイ

北ニ ケンクァヤソショウアレバ 行ッテ ツマラナイカラ

ヤメロトイイ

がありますが、

子どもの困っている時こそ「行ッテ」、つまり行動し、寄り添い、手を差し伸べるタイミングです。

共感する・受容するについて、具体的なイメージを再確認でき、子どもに正対するエネルギーをもらった研修となりました。



受講者の感想から

- ・「子どもに関わる」「子どもに着く・付く」「子どもに気づく」という普段からの姿勢こそが大切と改めて感じた。
- ・いじめの初期段階「力の強弱の試行の段階」を見逃さないことと「いじめ介入のレディネスの4点」がとても参考になった。